

1



0054638-000

特251-488

新説阿波風土記

富永完・著

博栄堂書店

第9編

昭和17

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

特251
488



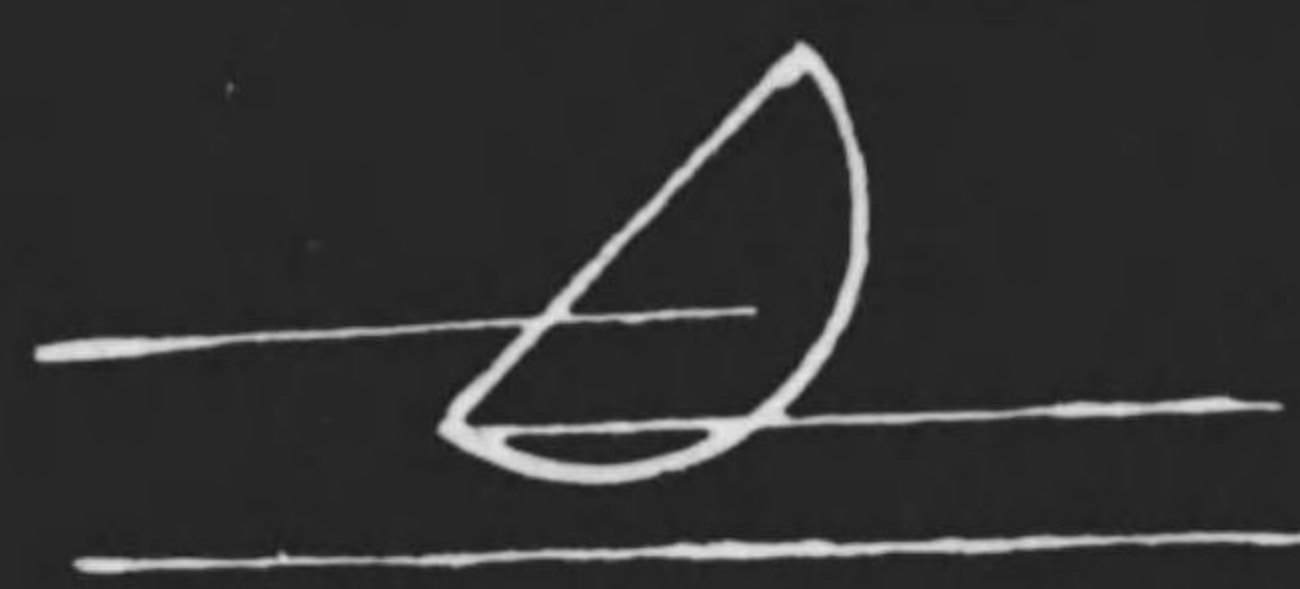
×
複写

説阿波風土記

第九編 河童の書



皇紀二千六百二年 富永完



特251
488

新説阿波風土記



河
童
の
書

富

永

完



幸福になり度い！これほど人の口の端にのぼりながら、しかも之れほど眞解されて居ないものは、おそろく世の中に無いだらう。萬人幸福を願ひ、幸福を畫策して居るが、千人中ひとりも何處に幸福が成立するかを知つて居らぬ

——セネカ——

痴愚の人々と云へどもこの書、韋編三絶に及ばは河童の旨とするところを體せん。

——河童の書より——

河童に關する傳説は數多い。私はかつて達筆に書きなぐつた河童の訛體文を見たことがあり。又河童が手型をもつて花押を押したと云ふ文献を読んだが、これもこれも、誠に現實性のなむたわいもない嘘と面白く思つた。

しかし私はこの一篇の物語を書くにあたり、昔から日本國土に立派に河童と云ふ水陸兩棲の動物が河川や池や沼に生息して居たと信じた。これは人間の及びもよらぬ訓育と鍊成を人間の子供にほどこした河童の話であるからである。

私のこの篇の種本を『河童の書』と云ふ。勿論全文漢文である。故あつて所有者及そのありかを詳細に出來ぬ。この本が徳川時代以前のもものを附記しておけるばかりである。

阿波の南方に阿波の松島と名づけられた島の多い灣がある。そこは風光絶佳の海である。

その大小とりどりの翠巒の島々の一つに小勝の島と云ふのがある、戸數は今でも二つか三つであるが、山あり野あり畑あり泉ありである。明治維新まで島民は他との交賀なく完全に自給自足して居た。

「河童の書」の一節にも

海に魚貝あり、海濱に鹽あり、山に野に四季の幸充ち衣に蠶あり棉あり、田畑には穀物の實結ぶ、燈火に菜種又魚油あり、家畜かはるがはるよく鳴き渡る。こんな意味の（志願してでも漂流したい）文句がある。

さて時代は戦國時代に溯る。――

天正年間長曾我元親土佐より阿波へ攻入つて、甲ノ浦、宍喰、鞆奥、日和佐等の城々を攻略して桑野の城（現在の那賀郡桑野）の攻撃をはじめた。この城は土佐方面よりの攻撃には山又山が重なつて要害の位置にあつたから、なかなか落城しなかつた。元親は謀略をもちひて和睦の詭計をもつてした。元親は互の違背なきしるしとして桑野城主の一子桑葉丸を人質として要求し彼も彼の養女をもつて人質とする旨を申し出た。はじめ桑野城主は城を枕にして討死する覺悟であつたが自己の所領や家來達を完全失ふはなくてすむのであつたら一たん和睦をして氣力と兵力を養ひ充分自信が出来たとき、元親をうち破る腹をきめて元親の要求に應じて桑葉丸を人質にやることに決めた。

しかし家老は賛成しなかつた。もしそれを斷行されるのであつたら、自分の子供川太郎が桑葉丸と同年輩で瓜二つであるのを幸に人質にしていただきたいと云つた。家老は元親の謀計を見破つて居たのである。

身がわりの川太郎が城主へ訣別の御挨拶に御前へ出たとき、川太郎を城主はふびんに思つた。なにもかも家老から云ひふくめ、さどされた姿がいぢらしくてしかたがなかつた。

愛刀を饒別に與へた。川太郎はありがたくおし載いて「御免」と叫び、鞘をはらつた刀の尖を自分の左の眼へ突込んだ。そこに居た人々は亂心したのだと川太郎のそばへ集まつたとき川太郎は從容として。

「川太郎は片眼をつぶしました。これでは人質としては若殿と瓜二つとは申されまゐ、私は身がわりに參上致すのが恐ろしいのでは御座りません私は人質にまゐるのでしたら切腹した方が武士の子供らしいと存じます、君の御前に見苦しく流血などして誠に申譯が御座りません御許し下さい。勝敗は天にあります、眞の武士であるなら最後の一兵卒になるまで戦ひ抜くのが武士道では御座りまするか、よし和睦をしてもいつの日かこちらの弱點につけ入つて、必ずや敵は攻めて來ます、百萬の文字の血判

も反古になりました。

殿！ 殿！

川太郎は血の流れ出る片眼をぐつと両手で押さへて叫んだ。

「川太郎！ 有難く思ふぞ、道は一つだ。うれしいぞ」

決心した城主の命令によつて恐ろしい戦争が幾晝夜か猛烈に續いた。しかし元親の軍勢と桑野城のそれとは數に於て質において問題にならなかつた。

城は落城して灰燼に歸してしまつた。

片眼の川太郎も微力ながらよく戦つた。友軍の屍をのりこへ切齒して敵に肉薄して進んだ。少年とも思へぬかがやかしいはたらきをして戦死してしまつた。

彼の倒れたところは桑野川の清流が美しく流れたお城の壕に水のかよう川べりであつた。そのころは敵が完全に城を包圍して居るときであつてもう天地はものすごい戦塵の中に黄昏れて、ものゝ黑白もわからなかつた。

忽然と川の中から浮び上つた一匹の河童は手疵をうけた川太郎をなにくれと看護するのであつたが川太郎の傷は重かつた。

幽に

「若君！ 若君！」と叫んだ、河童の居ることを知つた川太郎は「河童！ 河童！ 心あれば若君を守れ！ 河童！」と云ひながら身まかつてしまつた。

その間河童は合掌して居た。そして川太郎の屍を手厚く彼の心の如く清い桑野川の清流のほとりに埋めて一輪の花をそへていつまでもぬかすいて居た。

「若殿様わたくしは、桑野城のお壕に住んで居た河童で御座ります。桑野の里に住むわたし達、わたし達ばかりでは御座りません、一つの石、一本の草でもみんな殿様のお蔭を蒙つて居ないものはありません心なひ山河草木まで御恩のほどは決して忘れませんが、その郷土を敵の泥足にかけられたくありません、忠義せねばならぬことはよく心得ております。——川太郎さん以上に思つて居るつもりです。川太郎さんは無惨なしかし勇ましく君の馬前に討死にしました、最後まで若殿様のことを申して居りました。……わたくしは川太郎さんにかわつて忠勤をはげんでおつかへしたいと思ひます。……こゝは小勝の島です、決して敵にはみつかりません、こゝで心やおか

らだをこしらへて下さる、この島の中に雨つゆをしのげる小屋と風や雪にたへるしとねをつくつてあります、そこには米や麥や野菜の種子を置いてあります、草を刈り木を倒す鋤鎌具、魚貝を採る道具、粥をつくる竈もしつらへてあります——どうか御不自由ですがなにもかも御自分にやられて辛抱して下さい、必ずやこの島が若殿様の御手で切り開かれ草木が成熟し、鳥や蝶が舞ひ唄ふとき、若殿様の魂や身に美しい、しかもたくましい果實が結びましようから。——

夢とも幻ともなくこの言葉を耳にして桑葉丸は小勝の島の岸邊に遠い戦塵から遠ざかつて来たかも知らず現實の自分にかへつた。

海は蒼く島は翠に強烈な色彩に包まれて桑葉丸は荒修行へたちあがつたのである。

河童はいつも桑葉丸の夢幻の中に去來して、彼の心の舵をとり錬成と訓育をほどこし。彼が成長するにつれ次々ときびしく指導してやまなかつたのである。

阿波に住み慣れた人々にとつて、阿波と淡路にしかないあの酸味の強いしかも忘れ得ぬ味のすだち（柑橘類）の發生もこの河童が桑葉丸に與へた蜜柑と橘の配合による人工栽培のたまものである。

その昔、その名のごとく現在の那賀郡橋町の附近は山一帯に橘の木が密生して居てこれを小勝の島に河童が移植し桑葉丸に蜜柑の木に配合させたのがすだちであると“河童の書”はのべて居る。

海濱の砂地に千文字と木の片を置きて、河童は桑葉丸に手習させ、夏來れば海に入られて水泳を指導し遠い島々まで往復するまで習練をさせ又深くもぐらせて鮑さゞへを採らしめ、小山の樹木に木片を垂し、木刀をもつて腕を養はしめ、五月の雨には稲の苗を植へしめ秋の風には刈取つた稲のみを米粒にせしめ、漂着した種々の草花の種子を地にうづめしめて美しい花を咲かせ月雪とともに風流と閑日月を心をつちかはしめたのである。

似心傳心をもつて夢中に於てはぐみ現實に正氣をはかした河童の努力こそ血のにじむ尊いものがある。もとより自他共にこの河童の物語を信ずるものではない。しかし“河童の書”の著者が戦國時代に活眼を開いて君國日本の本の將來を憂ひ、あとより來る若い人々に萬丈の氣焰を吐き河童と桑葉丸に名をかつて烈しい鞭を與へた言行の結晶であると云ふもこれは過言ではあるまゝ、いつの世いつの時代にも指導者の貧困はどの階級に於ても及ばず影響は心あるものをして心をさむからしむる結果を生ずる

からである。

慣れると云ふことぐらゐ恐ろしい危険なものは御座りません。苦なしに物事が左右出来たら、何事ももうそれ以上進みも上達も致しません、油断やすきが生れます。幸福とか楽しとか云ふもの又身の苦しみや心の痛みと云ふものにも慣れたら、もう人間の完成は駄目で御座ります、人間はいつでも慣れたらなにごとによらず安逸になりがちです、安逸をむさぶるやうになつたら人間は駄目です、いつも峻烈な氷雪の坂道を登つて居る覺悟がなければ駄目です。これは昔第一步踏み出したときの自信を忘れるからです。

川太郎さんの言葉で桑野城が落城してしまつたと云へるかも知れませんが、和睦しておいたら、あるいはすべては安泰で城は築へたかも知れん、しかしそうすると武士の魂と云ふものが死滅してしまつたでしやう。——人間は如何なる時如何なる場合でも節を枉げてはなりません千萬人たりとも我行かんの氣概をもたなければなりません。この小勝の島には若殿様お一人住んで居られるのではありません、孤獨ちやと悲しまれたり淋しがつてはなりません、この島には決して若殿様お一人居られるのではあ

りません、若殿様のお體の血の中には、ずっと昔からの御先祖様たちがおいでになることを忘れてはなりません。考へたら又この島にはだれも居ません、なんにもなわやうな氣が致しませんか——いやこの自然天や地にはなんにもありません、あるものは今だけです、いや今と云ふときもうそれは今ではありません、一際いが空しいものです。

ある夜河童は唄ふ

菱の實は熟せど

遊き皮を着て

池の中にあり、

池は廣々として蒼穹を

心に抱き

さざなみも立てず。——

風あれど

夏の陽炎に追れて

池邊にねぶる——

菱の實を慾して

池心に棹させば

水はしすけさをうばわれ

水紋を描き風は驚いて

魚の心はみだれ

蒼穹の姿をくすす——

一味の菱の實のために

だれか自然の平和をみださんや——

× ×

この河童が五月節句には桑葉丸のためにどこで苦面して來るのか立派な五月幟を立て桑葉丸の將來を祝福するに杉の木を倒して桶型ものを作り飯と水と太陽でもつて酸酔させ酒に似たものを醸つて弓矢の神に献する條を私は奥ゆかしく思つて讀んだ。

梅雨降る頃、米粒一つに針で「天」の字を一字かゝせた、次の日は天地と米一粒にかゝせ、三日目には天地玄、四日目に天地玄黄と書かせた、かくして一粒の米に五十字書き得るまで練習をさせて居る項もある。

空飛ぶ鳥も一羽とてうちもらさぬまでに上達させた。即訓練又訓練、猛訓練をもつてしたのであつた。弓も秋の夜空のかりがねを鳴くねをき、耳だけで方向と高度を定め、兩眼を閉ぢて百中百發射止め落すまでになつたと河童が喜んで手をたたくところもある。

水中の魚は云ふに及ばず、草の中を走る小動物とて完全に射止め得るまでに河童は桑葉丸を指導したのであつた。

空腹にて旬日過しても苦痛のなみ試練もほごしたのである。

「あなたはこの島で仙人になるのでは御座りませんが、天下にとどろく武將になるのです。一國、一城の主となる心掛を捨ててはなりません。」

.....

本草綱目を蟲ぼししたやうに「河童の書」の河童は草根木皮を桑葉丸に採集させて薬品のかす／＼を調劑させて居る。

あるひは掌大の砂濱に鹽田を作り製鹽術を教へて居る。

又海岸の岩石を打ちくだいて防波堤の工事をさせ簡単な測量術を教へたり一方では家を建て、池を堀らして居る等から考へて來るとこの河童は——いやこの「河童の

書”の著者は恐ろしい程の學識の人と云はねばならぬ。
又兵法、築城の術まで傳授して居る日月の運行、星の移りかわりから占考にまで及んで居る。

私の幼時ごこの百姓の家にも『萬年曆』と云ふものがあつたが私は『河童の書』がそれ以上に人間の精神の鍊成を主としてしかも、河童を登場させ面白く物語風に記述されて居る點、まつたく感服して居るのである。尙これが漢文でなかつたらどれだけ効果を残して來たかを思ふと勿體なる心持になる。

かてゝある事情のため幾十年いやあるのは百年間も一つの舊家に死藏され今にこの公開を拒まれて居るのは誠に残念至極なやうに思へる。

私としては龐大なる幾十冊ものうづたかく積み重ねられた『河童の書』を自分の淺學のために完全に讀破し得ず、また寫し得なかつたのは慚愧に耐へなると思つて居るが、只阿波にもこうした門外不出ではあるがこうした古い書籍があることを誇としたのである。そして『河童の書』の河童が最後まで桑葉丸の前に正體をみせず聲のみで終つて居る點も面白いのである。

河童川太郎——私は河童でもなんでもよい、この非常時にこうした指導者の續出を望んでやまぬ次第である。

—丁—

阿波方言抄

- ・うち 私
- ・うちんく 拙宅
- ・うちやなわ 私では御座りません
- ・ごしやめんなはれ 御免下さいませ
- ・きい 來たれ!
- ・せこい 苦しい
- ・ひんず 餘分
- ・まがる 邪魔になる
- ・げしなる お寢になる
- ・おひなる お起になる
- ・いたい 熱い
- ・てんごに じようだんに

- ・ 山のてんど
- ・ うもれる
- ・ けんごまく
- ・ いつけ
- ・ はいりよ
- ・ ほがら
- ・ しんだい
- ・ いんで来る
- ・ えくそいき
- ・ んねさん
- ・ やね
- ・ しやが
- ・ さまはん
- ・ へちやこちや
- ・ かー

- 山の頂上
- むせる (夏暑くてむせるときに云ふ)
- あつてすいりよう
- 親類
- 頂戴
- 真空、空洞
- くたびれた
- 歸へる
- 無茶に
- 姉さん
- 肩の意
- まぢがひ
- お嬢さん
- あへこへ
- 下さる

- ・ いぬ
- ・ あんじように
- ・ けんたい
- ・ だんなる
- ・ すこい
- ・ こて
- ・ すばき
- ・ ごちやんぼ
- ・ しはしは
- ・ けんご

- 歸へる
- 上手に、(手ぎはよく)
- 無條件
- 差支なし
- するゐ
- 當推量
- すね
- 當つて居なる
- ゆるく (急がずに)

ほなけんご……………そうではありますが
 くれるけんご……………いたゞけるけれど
 ゆくけんご……………行くことは行きますが

もらへるけれど

429
292

新説阿波風土記既刊

第一編	十郎兵衛考
第二編	阿波藍傳來記
第三編	阿波木偶に就いての序説
第四編	阿波のぼんをどり
第五編	享和版阿波名所圖繪崎談
第六編	お札所の話
第七編	阿波狸合戦の事など
第九編	河童の書
第十編	阿波無風流歳事記
別巻	芋と學校長

昭和十七年十二月十日印刷
昭和十七年十二月十五日發行

河童の書
⑩ 頒價 十八錢

著者 富永 完
徳島高等工業學校圖書館

發行者 森住 一義
徳島市藍場町一丁目二十一番地

印刷所 高瀬 淺吉
徳島市柴町一丁目五番地ノ一

印刷所 公營印刷所
徳島市幸町三丁目一七
財団法人 名東郡自治協會

(西德二五)
電話 三四三三九番
三四二七九番
振替 徳島六七〇〇番

徳島市藍場町一丁目二十一番地
發行所 博葉堂書店

振替 徳島 四四七五番

